
いずれ消え行く煙のような

広野沙良

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

いずれ消え行く煙のような

【Nコード】

N2917C

【作者名】

広野沙良

【あらすじ】

狭いリビングにソファ。テレビの画面はなにも映らず、部屋にはしんと静寂だけがある。揺れ動くのは、男の吐き出す煙草の煙。

彼の吐いた紫煙が、ゆっくりと天井へと渦を描くように上っていく。

私はいつものように彼にしなだれかかったまま、それをぼんやりと眺めていた。

煙が天井に当たって散るのを待っていたかのように、また、新たな煙が立ち昇る。

その一部分だけ、真っ白いはずの壁紙が薄く黒ずんでいた。

一人になると、その黒ずみが私を覆って消してしまいそうでも怖くなる。

食事中、ベットに入る時、朝起きた時、家に居る時はいつもだ。

それなのに、彼と一緒にいるとそのなぜかその黒ずみがとても愛しい。

こうして傍に居る時に、彼が吸う煙草と何か関係があるのだろう。どちらかという私は煙草が苦手な方なのだけど、彼の吸う煙草は甘くほろ苦いチョコレートのように、私はどうにもやめられない。レストランや会社では体に纏わりつくようで、いつも不快に思うのに。

魔法使いの杖から生まれた靄のようなもので、王子様から心が離れないように魔法でもかけられているような気分になる。

けれど、彼はというと私になんてまったく興味のなさそうな顔をして、どこか違う方を眺めながら紫煙を燻らせている。

いつも、そう。

きっと、天井の黒ずみにも気が付いていないのだろう。

言えば掃除ぐらいしてくれるのかもしれないが、私は言うつもりはない。

拗ねたように声をかけると、彼は決まって困ったように笑いながら煙草の煙を纏ったままキスをしてくれていた。

だけど、今の私はその視線の先を追う事も、声をかける事もしない。

彼が煙草を吸っている間、私とその煙を見ている間、その間は一緒に居ても決して共有された時間ではなかったことに、気づいてしまったから。

だから今は彼が私に言い訳の言葉の代わりにキスをすることはもうない。

白い壁紙についた煤は、まだしばらく払われる事はないだろう。
今日も、少し広がったに違いない。

そして、明日になれば私はまたそれに襲われて、救いを求めるように彼に手を伸ばすのだ。

私は、今日も煙草の煙を見つめている。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2917c/>

いずれ消え行く煙のような

2010年10月9日19時11分発行